Angel Beats!＋オリ主 〜Another story〜

月下氷人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
Ａｎｇｅｌ　Ｂｅａｔｓ！＋オリ主　～Ａｎｏｔｈｅｒ　ｓｔｏｒｙ～

【Ｎコード】
Ｎ５６３９Ｙ

【作者名】
月下氷人

【あらすじ】
記憶を失った主人公「氷室（ひむろ）」は目が覚めると、そこは『死後の世界』であった。
そこで『死んだ世界戦線』のリーダー「ゆり」と出会い、無理矢理主人公「氷室」は入隊させられた。どうやら天使のいうことを聞いたりすると消されるらしい。消されないために今日も戦線メンバーは天使と戦うのであった。
※これはオリ主介入＋チート？です。苦手な方は戻るボタンを。ヒ

ロインはゆりっぺです。あと私はこれが人生初の小説投稿なので、あたたかい目で見てください。更新は不定期ですが、なるべく毎日投稿できるよう、頑張りたいと思います。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　死後の世界（前書き）

どうも初めまして。月下氷人です。最近ＡＢ！見てどうしても小説を書きたくなって、つい書いてしまいました。人生初の小説投稿なので、何卒よろしくお願いします。

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　死後の世界

～主人公ｓｉｄｅ～

「ん……？」

目が覚めると、俺の視界からきれいな夜空が広がっていた。
なんで俺はこんなとこで寝てたのか。そもそもここがどこなのか。
わからないことだらけだった。

「あら、目が覚めたようね」

突然、声をかけられたから後ろを振り向くと、そこにいたのは、黒のニーソックスを履いた、紫色の短髪の女の子がいた。

「えっと…。どちらさま？」

「そういうのはまず、自分から名乗るもんじゃない？」

「まあ、それもそうだな。俺は氷室だ。下の名前は……。わからない。お前は」

「ゆりよ。みんなからはゆりっぺって呼ばれてるわ。まあ、呼ぶときは好きなようによんでくれればいいわよ。よろしくね」

「ああ、よろしく」

とりあえず簡単な自己紹介をした。あと何故スナイパー？を持っているのかは気になるけど、とりあえずスルーしといた。

「とりあえず歩きましょ」

「ちょっと待て！　俺は聞きたいことが「あ・る・き・ま・しょ♪」

「…はい」

「よろしい」

ゆりの言葉から殺意を感じたので、何も言い返すことが言えなかった。

「えっと…。どこに行くんだ？」

「校庭よ」

何で校庭に行くのかわからなかったけど、とりあえずついて行くことにした。

少し歩いて、ゆりは俺に話しかけてきた。

「氷室君。唐突で悪いけど、入隊してくれないかしら？」

「入隊？」

「ここにいるってことは氷室君、あなた死んだのよ」

ｗｈａｔ？　何言ってんだこいつ？　頭がおかしいんじゃないか。

「はあ？　なに言って「ここは死後の世界よ。何もしなければ消されるわよ」

「消される？　誰に？」

「そりゃあ神様でしょ」

もうさっきから何を言ってるのかさっぱりわからない。俺が死んだ？　その時点でわけがわからない。　俺は死んだ憶えがまったくない。というより自分の苗字以外何も思い出せない。

「じゃあ入隊って？」

「死んでたまるか戦線によ」

「死んでたまるか戦線？」

「そう。まあ、要するに消されないために戦っていく組織よ。あ、ちなみにもともとの組織名は死んだ世界戦線だったけど、それだと死んだことになるんじゃね？ってことでいろいろ改名してった結果死んでたまるか戦線になったのよ。あと新しい名前募集中よ」

「まあ名前はともかく、戦うって何と？」

「天使よ、と噂をすれば」

俺たちはいろいろと話しているうちに、校庭の近くの花壇についていた。校庭には銀髪のかわいらしい女の子がいた。

ゆりは携帯をポケットから出した。

「日向君。天使を発見したわ。場所は
校庭よ。大至急こちらに来て。あと新メンバーゲットよ」

どうやら応援を呼んだらしい。
仮にここが死後の世界だとしても携帯は使えるんだな。

ゆりは携帯をポケットにしまい、あの子にさっきから持っていたスナイパー？を向けた。

「一応聞くけど、それ、本物？」

「あたりまえじゃない」

「何故女の子に銃を向けている？」

「彼女が天使だからよ」

「本当に？」

「嘘ついて何になるっていうのよ」

「まあ、　それもそうだけど…」

でもイマイチ信用できない。どう見ても、見た目は普通の女の子にしか見えない。

「誰が信用できないですって！？」

あ、声に出てたか。

「女の子に銃を向ける奴が信用できるか！俺はあの女の子にお前の話が本当かどうか聞いてくる」

「はあ！？それ本気で言ってるの！？」

「ああ。　本気だ」

「あ、ちょっと待ちなさいよ」

と言って俺は女の子の方に向かった。

～ＮＯ　ｓｉｄｅ～

「ゆりっぺ。今来たぞ」

「あら日向君。来たわね」

「で新入りさんはどこ？」

「あそこよ」

ゆりは校庭の方を指をさした。

「何で天使のとこにいんだよ！？」

「勧誘に失敗したわ…」

「何やってるんだよ。で、どうする？」

「まあ、とりあえず様子を見ましょ。どうせ死なないし」

～氷室ｓｉｄｅ～

俺はゆりの話が本当かどうか確かめるために銀髪の女の子のとこに行った。

「ねえ、そこの君」

「？」

「なんか向こうにいるバカがお前のこと天使とか言ってたぞ」

「私は天使なんかじゃないわ」

「だよね～」

やっぱりそうだった。こんな子が天使な訳がないよな。天使のような可愛い子だけれど。

「じゃああんた何者？」

「私は生徒会長よ」

「そうか。じゃあもう一つ聞いていいか？」

「？」

「ここはどこだ？」

「死後の世界よ」

あれ…。ゆりと同じこと言ってる…。

「は？マジで？じゃあ、証明してみろよ！」

「…ｈａｎｄｓｏｎｉｃ」

女の子の左手首あたりから刃物が出てきた。
そして俺の心臓をめがけてその刃物で刺そうとしてきた。
俺はなんとかよけることが出来た。

「ちょ、あぶねーじゃねーか！！」

「あなたが証明しろと言ったから」

「いきなりそういうことやるか！！」

と言っているうちに、また女の子は俺に切りかかってきた。
暫く俺はよけ続けた。しかし、俺よくよけ続けられてるな～。なんだか体が軽い。動きもよめる。あー、でもだいぶよけることがだる

くなってきた。よし、もう諦めよう。ここが本当に死後の世界なら心臓を刺されても死ぬわけないだろう。多分…。
俺はわざと心臓を刺された。やべっ。　思ったよりすげー痛い。
そして俺は意識を失った。

これから俺はどうなるのだろうか。

「なかなかやるじゃない、氷室君。あの天使と互角に殺りあうとは…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ１　死後の世界（後書き）

楽しんでいただけたでしょうか？
小説書くのなかなか難しい。
更新は不定期ですけどなるべく早く投稿できるようにしたいと思います。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　死んだ世界戦線（前書き）

ゆりっぺがキャラ崩壊しているような…

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　死んだ世界戦線

～氷室ｓｉｄｅ～

「ん…」

目が覚めると、俺は上半身裸でベットで横になっていた。周りを見ると、どうやらここは保健室らしいな。外を見るともう昼くらいになっていた。

「あれ……？　俺…」

あ。俺昨日あの女の子…いや天使に心臓を刺されたんだった。証拠に俺が着ていた学ランとワイシャツが血まみれになっていた。やっぱり心臓貫かれても死んでない（この世界において）ということは、ここはやっぱここは死後の世界なのか。俺やっぱ死んだのか。生前の記憶全然ないけど。
もうちょっと寝ようかなーと思った時、

ガラッ

「あら　、起きたのね」

中に入ってきたのはゆりであった。

寝ようと思ったのに…

「ああ」

「それにしても氷室君、なかなかやるわね」

「何が？」

「昨日のことよ。天使と互角に戦ってたじゃない」

「いや。なんかなんとなく相手の動きが読めて…」

「ふ～ん」

自分でも驚きだった。俺は生前何をやってたのだろうか。軍隊にも入ってたんじゃないのか？　…いやないか。

「それより俺は聞きたいことが「あっこれ。戦線の制服だからあとで着替えといて」

少しは俺の話を聞いてくれ…
俺はゆりからブレザーの制服を渡された。
俺はもう入隊する前提かよ。まあ、昨日のことがあったからまあ、いいけど。

「んじゃ、今着替えるわ」

俺はベットから降りて、着ているズボンを脱ごうとしたとき

「ちょっ／／／／　何女の子の前で堂々と脱ごうとしてるのよ！！！」

と頬を赤くしながらゆりは俺に言ってきた。

「あ、いや。わりぃー。お前を女だって全然認識してなかったら……」

「それはどういうことかしら？」

ゆりは手首をポキポキしながら満遍な笑みをして言ってきた。ゆりさん…　マジで怖いですよ。

「ゆり。暴力はなしにしよう」

「死ねーーー！！！」

俺は顔面にパンチをおもいっきりくらった。

ゆりは保健室を出てしまった。マジでいてー。

「……。とりあえず着替えてここを出るか」

俺は着替えて保健室を出た。

保健室を出たすぐ目の前にゆりがいた。
待っててくれたのか。

「あの…。さっきはゴメン」

「…さっきのパンチでチャラでいいわよ。それより行きましょ」

「どこに？」

「私たちの本拠地へ」

俺たちはゆりの言う本拠地へ向かった。

「そういえば昨日誰が俺のことを保健室に運んでくれたんだ？」

「私と日向君って言う人よ」

「そうか。ありがとな、ゆり」

「えっ／／／／　氷室君が素直にお礼を言うとは…」

「言っちゃ悪いかよ」

「いや、別に…／／／　天使を欺くの大変だったんだからね／／／／！」

少し頬を赤くしながらゆりは言った。

そうか。あとで日向っていう奴にもお礼を言わないとな。

～ゆりｓｉｄｅ～

もう。あんな笑顔でお礼を言われて、ちょっとドキドキしちゃったじゃない。氷室君、けっこうかっこいいかも…　って私なに考えてるんだろ。まあ、頼りにはなりそうね。

～氷室ｓｉｄｅ～

「えっと…　ちょっと質問していいか？」

「あ、でもそろそろ着くから」

「そうか」

まあ質問はあとでいいか。

「さあ、着いたわよ」

「ってここ校長室じゃないか」

「そうよ。そしてここが死んだ世界戦線の本拠地よ。天使の侵入を一度も許した事がないわ。ちなみに組織名を元に戻したわ」

「そうかい」

っていうかどんだけ名前にこだわっているんだよ…。

「とりあえず入るか」

「あ…。ちょっと待っ…」

「ん？」

俺がドアノブに触れた瞬間、巨大なハンマーが俺に目掛けてとんできた。

「ちょっ。あぶねーじゃねーか！！！！」

なんとか自分の瞬発力でかわした。

「言うのの忘れてたけど、ドアに対天使用の罠がしかけてあるから」

「言うのおせーーよ！！！！！　」

「てへっ★」

「てへっ　じゃねーよ！！　危うく吹っ飛ばされそうになったじゃねーか！！」

「いやー。ごめんごめん。これには合言葉が必要なのよ。『神も仏も天使もなし』　これでもう大丈夫よ」

「神も仏も天使もなしか…」

俺はこの言葉を頭に刻み込んでおいた。

校長室に入ると俺とおんなじ制服を着た人達が何人かいた。

「おっ。こいつが新入りか」

長ドスを持った男が言ってきた。

「あの罠をかわすとは。凄いなー」

今度は青髪の男が言ってきた。

「彼が朝、私が言った新人よ。名前は氷室君よ。とりあえず皆、一人ずつ自己紹介してって」

「じゃあまず俺から。俺は日向だ。見たどおり俺はかっこよ…「見たどおりちゃらんぽらんな奴よ」って全然フォローになってないぞ！」

「まあ、たまに頼りになる奴よ」

「よろしくな、氷室」

「ああ、よろしく、日向。そういえば、昨日保健室まで運んでくれてありがとな」

「いいってことだ。俺たちもう仲間だろ。」

「そうだな」

「俺は松下だ。よろしくな。」

「ああ、よろしく」

「彼は柔道が五段だから敬意を込めて、みんなは松下五段と呼んでいるわ。」

「松下五段か…」

「僕は大山。えっと…「特徴がないのが特徴よ」ははは…。よろしくね」

「ああ、よろしく」

「ｃｏｍｅ　ｏｎ～　ｌｅｔ'ｓ　ｄａｎｃｅ！」

「いや。躍んねーよ」

「彼なりの挨拶よ。みんなはＴＫって呼んでいるわ。本名は誰も知らない謎の男よ。ちなみに彼、英語得意そうだけど実際のところ全然できないわ」

「そうか。よろしくな」

「Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅ　ｔｏｏ～」

面白そうな奴ばかりだな～。

「私は高松です。よろしく」

「よろしく」

「彼、頭良さそうだけどただの筋肉バカよ」

「そうなのか…」

「俺は藤巻だ。よろしくな。新人」

「ああ、よろしく」

「……」

「えっと…」

「彼女は椎名さん。いつもあさはかなりぃーと言っているわ。彼女は可愛いものに弱いわ」

「そうか」

「私は岩沢だ。よろしく」

「ああ、よろしく」

「彼女はガルデモのリーダー兼陽動部隊よ」

「ガルデモ？」

「ガールズ・デッド・モンスター。略してガルデモ。バンド名のことだ」

岩沢が言った。

「へえーバンドやってんのか」

「まあ、そのほかにも…」

ゆりが言おうと言った瞬間、ドアがバンッと開いた。

「おい、新人！　ゆりっぺが認めたからって俺は認めていな…」

ハルバードを持った男が喋ってる途中、ハンマーが彼に当たり、飛んで行った。

ああ…　罠が作動したんだな。

「自分で仕掛けた罠なのに…。アホだ」

日向が呆れて言った。

「さっき飛んで行ったバカは野田君よ」

「そうか」

「他にもメンバーは何十人かいるわ」

「へぇー」

暫くみんなと話をした。
みんなとすぐに仲良くなるができた。まあ、納得してない奴約一名いるが…。

「まあ、今日はもう解散でいいわ。別にもうやる事ないし…。あと氷室君。あとで屋上へ来て。聞きたい事がたくさんあるんでしょ？」

「ああ」

ゆりが解散と言ったからみんな何処かへ行ってしまった。
……俺も行くか。
俺は屋上へ行った。

みんな面白い奴だな～。
なんだか楽しくなりそうだな。

Ｅｐｉｓｏｄｅ２　死んだ世界戦線（後書き）

みんなどんなキャラなのか全然わからない…

主人公設定（前書き）

オリ主の設定です。
イメージを崩されたくない方は見ない方がいいかも…

主人公設定

※若干ネタバレがあります

・名前　氷室（ひむろ）
・身長　１７７ｃｍ　（日向よりわずかに高い）
・体重　６５ｋｇ
・髪型　ガンダムＳＥＥＤのキラ・ヤマトみたいな
・好きなこと（もの）　寝ること　１００％アップルジュース
　甘いもの　　からかうこと
・嫌いなこと（もの）　特になし
・武器　主に日本刀
・顔　イケメン（本人自覚なし）

けっこうめんどくさがり屋。けどやるときはやる。頭はかなりいい。けど、アホ。
日本刀をもらってからいつも背中に背負っている。少し鈍感。子供っぽい一面もある。男友達では日向と一番仲がいい。仲間思いである。
生前と下の名前はのちに明かすつもりです。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　この世界について（前書き）

タイトルテキトーですみません。

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　この世界について

～氷室ｓｉｄｅ～

俺は今屋上へ向かっている。ゆりが屋上で話そうと言ったからである。
廊下を歩いていたら、掲示板にガルデモのポスターが貼ってあった。

「バンドか～。今度演奏聞いてみたいな」

「ねえ。このポスターみてるってことは、ガルデモに興味あるの？」

突如ピンク色の髪の女の子が俺に話しかけてきた。

「あなたその制服着てるってことは戦線のメンバー？」

「ああ。今日入ったばかりだ。」

「あなたが新人さんね。あたしユイっていいます。」

「俺は氷室」

「よろしくです。氷室先輩」

「ああ、よろしく」

先輩って言ってるからこいつ下級生か～。

「ところで先輩。ガルデモに興味あるのあるんですか？」

「まあ、少しは…」

「あたしガルデモの超ファンでアシスタントをしてるんですよ。もぉ～あたし岩沢さんのギターと歌が好きでー。特にＣｒｏｗ　Ｓｏｎｇ　が…」

こんな話が暫く続いた。

俺のポケットに入ってる携帯が鳴った。

「それで…」

「悪りぃユイ」

と言って俺は携帯を取り出し、電話にでた。

「もしも…「氷室君！　いつまで待たせるのよ！！
」
「あ…。悪りぃ。今すぐ行く」
「１０秒で来なさい」
電話が切れた。ユイの話を聞いてたら、忘れてた…。ってか、いつの間に俺の番号知ったんだよ。俺にプライバシーはないのか…。
「悪りぃ、ユイ。今すぐ屋上へ来いとゆりが…」
「そうですか。わかりました。なんか呼び止めたりなんかしてすみませんでした」
「別にいいよ。ガルデモのことよくわかったし」
「そうですか。じゃあ頑張ってください」
「おう。じゃあ」
俺はダッシュで屋上へ向かった。
ゆりかなり怒ってるだろうなー。

俺はこの世界に来て一番のダッシュをした。

「はぁーはぁー」

「おそーーい！！！　一体なにしてたのよ」

「ユイって奴に捕まってた。」

「全く…。まあいいわ。早速話をしましょ。でまず私から注意事項が」

「なんだ？」

「まず、授業や部活はまともに受けてはダメよ。消える対象になるから」

「わかった」

「次に私たち以外の生徒…ＮＰＣ（ノンプレイヤーキャラクター）っていうんだけど、そいつらには基本、手を出しちゃダメよ。あくまで私たちの標的は天使よ。それが私たちのポリシーよ」

「ＮＰＣって…　あのゲームとかで一定の会話しかしない…」

「そうよ。例えて言うならばね。あいつらはもともとここにいる模範って意味よ」

「じゃあ話しかけても一定の答えしか返ってこないのか？」

「そんなことないわ。最初は私たちと違いがわからないはずよ。なんだったらそこらへんの女の子にカンチョーでもしてみたら」

「そうか。じゃあ…」

俺はしゃがんで、両手をあわせ、人差し指を伸ばし、ゆりにカンチョーしようとした。

「ちょっと…／／／／何私にカンチョーしようとしてるのよ！／／／／／」

「お前がそこらへんの女の子にカンチョーしてみればと言われたから」

「人の話し聞いてた？　ＮＰＣの女に決まってるでしょ！！」

そんなことわかっている。ゆりに殴られっぱなしだったからな～。その仕返しだ！！

ゆりは俺のことを蹴ろうとしたが、自分の瞬発力のおかげでかわすことができた。

「隙ありー！」

グサッ

「あんっ／／／」

俺はスカートの上からカンチョーすることに成功した。

「このっ…　変態がーー！！！！！」

俺はそのあとかなりボコボコにされたことは言うまでもない…

「……（この私がカンチョーされるとは…。一生の不覚だわ）」

「本当に悪かったから～」

「……もういいわ。それで何か質問ある？」

「えっと…じゃあここって天国？　地獄？」

「さあ。でも少なくとも地獄にはこんな立派な学校あるとでも？」

「確かに…」

「ここに来る人間は大抵、自分の人生が納得していない人が来るところよ」

「そうなのか…。ゆりも生前にいろんなことがあったのか」

「そうね」

「よかったら聞かせてくれないか、ゆりの生前。嫌なら別にいいけど…」

「……いいわ、教えてあげる」

俺はゆりの過去を知った。
妹と弟を守れなかったことに後悔しているらしい。

「そうか…。でもゆりって強いよな～。リーダーが務まってる訳がわかったよ」

「でも私は…」

「ゆりはなんも悪くねーよ。立派な姉だったじゃん」

「でも私はそんな人生にした神様を許さない。だから私は神様に抗っているの」

「そうか…」

ゆりがあんな過去があるくらいだからみんなもそのくらいの過去があるのか。ってことは俺も……。

「じゃあ天使に従ったら消されるって言ってたけど、消されたらどうなる？」

「生まれ変わるんじゃない？まあ、生まれ変われても魂が人間に宿るとは限らないし。ミジンコとかになるかも」

「ミジンコ…。えっとあと……武器ってくれるの」

「ええ、もちろんよ。何か注文とかある？」

「じゃあ…日本刀」

「なんで日本刀？まあ、いいけど。一応銃も準備するわ」

「すまねえ」

「他に質問は？」

「腹って減る？」

「普通に減るわ」

「季節ってある？」
「あるにはあるわよ。ちなみに今は１０月よ」
「寝るとこは？」
「男子寮があるから後で日向君にでも案内してもらって」
「ゆりのバストは？」
「○○ｃｍよ…って何言わせてるんじゃー！！！」
「ぐはっ…」

また顔面を殴られた。まあ１００％俺が悪いけど…。

「まったく…。最初会った時は、普通の常識人だと思ったのに…。
またしてもアホが入ってくるとは…」
「悪かったな」
「で、もう質問は以上？」
「ああ」
「されじゃあそろそろ晩御飯の時間だから食堂で一緒に食べましょ。
はいこれ食券」

「おっサンキュー…ってこの食券ライス（中）じゃん」

「そうよ。私にセクハラ行為した罰よ」

「う…」

こうして俺の夕食はライスだけとなった。
ライスだけじゃ足りなかったので日向から肉うどんを分けてもらった。

俺は食後日向と寮へ行き、眠かったからすぐに寝た。

なんだかめっちゃ疲れた…

Ｅｐｉｓｏｄｅ３　この世界について（後書き）

ちなみに寮は日向と同じ部屋ってことにしています。男子寮は基本２人部屋で設定しています。

氷室「なんで日向と一緒の部屋？１人でゆっくり寝たいんだけど」

作者「まあまあ。落ち着け」

日向「そうだぞ」

作「日向はかなり喜んでたし」

氷「まさか…日向…ゲイなのか」

日「ちげーよ！！なんで俺が「それじゃあ」

氷・作「次回をお楽しみにー」

日「人の話聞けーーー！！！」

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　オペレーショントルネード

～作戦会議

会話文が多くなったしまった。
どうしても空気のなるキャラがでてくる…
基本主人公視点で行きます。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　オペレーショントルネード　～作戦会議

～氷室ｓｉｄｅ～

俺は昼寝をしようと屋上へ行った。

「いい天気だな～。それじゃあ、さっそく寝るか」

俺は横になり、睡眠を始めた。

３０分後…

ピピピィ…（着信音）
俺の携帯が鳴った。
でるのめんどい…

ピィ（携帯にでる音）

「もしもし…」

「氷室君？　今すぐ本部に来て」

「却下」

ピィ（携帯をきる音）

俺は携帯をきった。

もうちょっと俺は昼寝がしたいんだよ。

ピピピィ…（着信音）

「はあ～」

ピィ（携帯にでる音）

「もしも「来なかった場合ぶっ殺…」

ピィ（携帯をきる音）

「はあ～」

ため息を2回もしてしまった。…行くか。ぶっ殺されたくないし…

俺は校長室へ向かった。

「ういーす」

「おせーぞ！」

藤巻が言った。どうやら俺が一番最後に来たらしい。

「わりぃーわりぃー」

「来たわね」

今度はゆりが言った。

「はい、これ。刀と銃よ」

「サンキュー」

俺が注文しといた武器をもらって刀は背中にしょい、銃は懐にしまった。

「おっ。刀か～。なんで刀にしたん？」

日向が聞いてきた。

「まあ、なんとなくだよ。なんというか…。刀が好きなんだよ」

「そうか」

「そういえばゆり。武器ってどこで作ってんの？」

「ギルドっていう地下で作っているのよ」

「今度お礼でも言いに行くわ」

「そう。今度案内するわ」

「ところで今日の作戦はなんだ？」

藤巻が言った。

「そうね。じゃあ始めましょうか」

ゆりが言うと辺りが暗くなり、スクリーンが出され、いかにも作戦会議って感じになった。

「今日は氷室君が作戦に慣れてもらうために、いつもやっている簡単な作戦に参加してもらうわ。その名も…オペレーショントルネード」

「ええっ」

「う～む。こいつはでかいのが来たな」

大山、松下五段が言った。

「トルネード…。それってどんな作戦なんだ？」

「生徒から食券を巻き上げる！！」

「その巻き上げるかよ！！」

思わずツッコんでしまった。
生徒から巻き上げるなんて…

「それ要するにかつあげだろ？」

「まあ、そうね」

「武器や頭数だけそろえてあげくの果てにかつあげとは…。あきれるぜ」

「貴様。それはゆりっぺに対する侮辱発言だ。今すぐ撤回しろ」

野田がつっかかってきた。

「うるせぇ！　ってかそんな危ないもの振り回すな」

「んだとぉー！！」

「まあまあ、落ち着け2人とも。」

「ｏｈ、野田っち、氷室っち。ｒｅｌａｘ～」

「そうだよ、野田君、氷室君」

「あさはかなり…」

日向、ＴＫ、大山、椎名がフォローしてくれた。

「我々は数や力で生徒を脅かしたりは決してしない」

松下五段が言った。

「続けていいかしら？」

「おう」

「氷室君は武装して所定の位置で待機。天使が来たらその進行を食い止めて。細かい位置はあとで大山君か高松君に確認して」

「あははっ」

「ふっ」

ゆりがそう言うと、大山は俺に手を振り、高松は眼鏡をずらし、カッコつけてきた。

「岩沢さん。今日も頼んだわよ。」

「了解」

「天使が来たら各自発砲。銃声が増援の合図になるから。氷室君、わかった？」

「ああ」

「作戦開始時刻は１８３０。オペレーション、スタート！！」

こうして俺の初めての作戦が始まった。

どうなるやら…。

Ｅｐｉｓｏｄｅ４　オペレーショントルネード

～作戦会議

作者「いや～。無事４話も終わりましたね～」

日向「そうだね～」

椎名「あさはかなり…」

作「小説書くの難しい…」

日「こちら側として毎日更新してほしいよ。なあ椎名っち」

椎「……」

日「なんかしゃべれよ！」

作「まあまあ。それじゃあ」

日・作「「次回をお楽しみにー」」

椎「あさはかなり…」

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　オペレーショントルネード　～実行編～（前書き）

オペレーション実行編です
戦闘描写難しい
※原作とは違うところがかなりあります。
ってか最初から違うか

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　オペレーショントルネード　～実行編～

～氷室ｓｉｄｅ～

作戦開始３０分前

俺は食堂の外で日向と話をしていた。

「そういえば、俺銃の使い方わかんないんだけど」

「銃はこうして…こう撃つ！」

「ああ、なるほど」

俺はすぐに理解した。

「こうして…「おい、なんで銃口をこっちに向けてる？」

「撃つ！」

バンッ

俺は日向の頭を撃った。
日向よ…　。安らかに眠れ…。

１０分後

「ファーイ！？なんで俺を的にする？」
「いやー。手が滑った」
「どうみても確信犯だろ！」
「あー、もうそろそろ時間だからもう行くぞ」
「おいっ。人の話を聞けっ」

日向を無視し、俺の所定の位置、第二連絡橋へ向かった。

～ＮＯ　ｓｉｄｅ～

食堂は今、大勢の生徒でにぎわっていた。

「こちら遊佐。岩沢さん、照明と音響の準備出来ました」

遊佐は岩沢に電話をしていた。

「了解」

「よし、入江、ひさ子、関根、いっちょやるぞ！」

「「「おおー！」」」

～氷室ｓｉｄｅ～

俺は第二連絡橋で待機していた。
あーあー。俺もガルデモの演奏聴きたかったなー。
……暇だからゆりにでも電話しよ。

プルルル…

「もしもし、何の用、氷室君？」

「あ…（暇だったから電話したって言ったら、確実にぶん殴られる。作戦中だし）　えーと……ゆりと話がしたかったから電話した」

「え…／／／／　い、今作戦中よ／／／／用もないのに電話してこないで／／／／」

「へーい」

ガチャ…（電話をきる音）

やっぱり怒られた…。

～ゆりｓｉｄｅ～

氷室君作戦中に何用も無いのに電話してきてるのよ。まったく…。でもわたしと話したくて電話したって…ってなに考えてるのよ私／／／今は作戦に集中しなきゃ。

～氷室ｓｉｄｅ～

「ふぁーー…」

俺はあくびをしていた。暇だなー。

「そこで何してるの？」

「ん…うわっ！！　天使じゃん。お、お前こそなにやってんだよ？」

「今食堂でが大変なことになってるから、それを注意しに」

「……悪いな。俺はお前をここで足止めするためにここで待機してたんだ」

「……そう」

「ってことで帰ってくれ」

俺は銃を構え、天使に撃った。

バンッ

見事腹に命中した。

「よし」

すると…

「Ｇｕａｒｄ　Ｓｋｉｌｌ」

天使の傷はいとも簡単に治ってしまった。

「ええー！！　チートじゃんその能力」

天使の能力…ずるい…

「…Ｈａｎｄ　Ｓｏｎｉｃ」

あの時のように、両方の手首から刃物がでてきた。けど今回は…俺も武器を持っている。
俺は背中に背負ってた日本刀を抜いた。

「よっと」

「……」

キンッ

俺の刃と天使の刃が交じあった。

キンッ　キンッ　キンッ

何度も刃と刃が交じあった。
以外と動きについていける。
これならなんとか…なる訳ないよな…。

～日向ｓｉｄｅ～

俺は食堂の前で待機してた。

バンッ

「おい今向こうの方で発砲したぞ」

野田が言った。

「向こうの方って氷室がいる場所じゃん」

これは少し痛いところに攻められたなー。

「援護しに行くぞ」

俺、野田、ＴＫ、松下五段、大山、藤巻で援護しに行った。

～氷室ｓｉｄｅ～

キンッ　キンッ

ああークソ。めんどくせー。早くみんな来いよ。

「おい、よけろ！！」

おっ。ようやく来たか。

「わかった」

俺はみんなのとこに行った。

「撃てーー！！」

日向の合図でみんなが撃った。

「Ｇｕａｒｄ　ｓｋｉｌｌ」

だが、弾ははじき返された。

「チッ…」

「待たせたな！」

「Ｇｅｔ　ｙｏｕ　ｌｉｔｔｌｅ　ｋｉｌｌｓ！」

「こっちの弱いところをつかれたんじゃねかぁー！？」

「でもまだハンドソニックだけだよ」

「うーむ」

日向、野田、ＴＫ、松下五段、大山、藤巻がかけつけて来てくれた。

「いやー、助かったよ」

「けどお前けっこう余裕そうだったじゃん」

日向が言ってきた。

「んなことねーよ」

「みんあ広いところへ行くぞ」

藤巻が言った。

松下五段がロケットランチャーを吹っ飛ばし、広い所へ逃げた。

その後、椎名、高松がかけつけてくれた。

けど俺らはおされてた。

俺はゆりに電話をした。

「おいっゆり！　まだか？」

「もうそろそろよ。一回きるわよ」

あ…きれた。早くしてくれ…。

腹減った…。

～ゆりｓｉｄｅ～

その頃食堂は…
ライブは最高潮に達していた。
「そろそろ頃合いね…。回せ」
私は遊佐さんに指示をだした。

「回して下さい」

遊佐さんはさらに別の人に指示をした。
巨大扇風機が回り始まった。そして食券が勢いよく舞い上がり、外の方へ飛んでいく。

「とりあえず、作戦は成功ね」

「はい」

遊佐さんは言った。

～氷室ｓｉｄｅ～

突如紙が食堂から飛んできた。
そして俺はその紙を拾った。

「ああーこれ食券かー。もう何枚か拾っとこー」

「氷室。とっとと行くぞ」

日向が言った。

「おう」

俺たちは食堂へ向かった。

食堂にて…

俺はゆりと日向と食事することにした。
俺は麻婆豆腐を頼んだ。

「にしてもこの麻婆豆腐やけに赤いな」

「え…氷室君麻婆豆腐にしたの！？」

「ご愁傷さまだ…」

二人とも何言ってるんだ？

「まあとりあえずいただきます」

パクッ

「「……」」

「ん…うっ。辛い…けど意外とうまいかも…」

「無理しなくてもいいぞ」

「そうよ」

「本当にうまいぞ。ほれ、二人とも食ってみろ」

俺は麻婆豆腐を蓮華（れんげ）ですくい、まずはゆりに差し出した。

「いいわよ別に…」

「ほれあ～ん」

「あ～んじゃないわよ／／／／恥ずかしいじゃない／／／」

「ゆりっぺが照れてる…。これはレアだ！」

「う、うるさい／／／」

「ほれ」

「……じゃあ」

パクッ

「う…辛い…けど美味しい…」

「だろ！　ほらー。日向も食え」

「じゃあ…」

「辛いけど…たしかにうまい」

「だろ！！」

「……／／／／」

そして俺らは食事を終え、俺と日向は寮へ戻った。何故かゆりはずっと黙っていた。

「にしてもゆりっぺにあ～んをするなんて。流石だぜ氷室。ゆりっぺデレてたし」

「そうか？あ～んしちゃまずかったか？」

「……鈍感だ」

意味がわからん…。

こうして俺の初めての作戦は終止符を打たれた。

眠いから寝よ……。

～ゆりｓｉｄｅ～

氷室君にあ～んをされてしまった。少し恥ずかしかったけど…嬉しかった…

また何考えてんだろ私。

……寝よ。

Ｅｐｉｓｏｄｅ５　オペレーショントルネード　～実行編～（後書き）

作者「無事オペレーショントルネード編を終えることが出来ましたー」

遊佐「ちょっと私の出番が少ないです…」

作「まあそりゃーサブキャラだから」

遊「もっと出番増やしてください」

作「でも…「増やしてください」

作「……考えておきます」

遊「それじゃあ…」

作・遊「「次回をお楽しみにー」」

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　　鬼ごっこ（前書き）

更新遅れてすみません。
誤字脱字がありましたら、言ってください。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　鬼ごっこ

～氷室ｓｉｄｅ～

今俺たち戦線のメンバーは校長室に集合していた。もちろんゆりに呼ばれたからである。

「みんな集まったわね？」

「ああ、んで今日は何をやるんだ？」

藤巻が言った。

「今日は…鬼ごっこをやるわよ」

「鬼ごっこってあの鬼ごっこか？」

「ええ、そうよ。　まあこの鬼ごっこは氷室君の実力を見るための鬼ごっこだから」

「俺の？」

「ってことは普通の鬼ごっことはルールは違うわけですね」

高松が言った。

「その通りよ。まず鬼は逃げてるものにタッチするのではなく、倒すのよ」

「ってことは武器を使っていいのか？」

野田が言った。

「もちろんよ。あ、ちなみに逃げるのは氷室君で他はみんな鬼よ」

「おい！！　どういうことだよ！？」

「言ったとおりよ。氷室君も攻撃していいわよ。倒された人はその時点でリタイア。氷室君が私たち全員倒すか、逃げ切れたら、あなたの勝ちよ。逆に氷室君がやられた瞬間私たちの勝ちよ。」

「これただ俺に対するいじめじゃないか！！」

「貴様。ゆりっぺが言ったことを否定するのか？」

野田がハルバードの刃を向けてきて言った。

「どうみても俺のほうが不利だろ！！」

「んなことどうでもいいんだよ！！！」

「落ち着けって。ゆりっぺ。確かに氷室1人はきつくねーか？」

日向がフォローしてくれた。いやー、本当にありがとう。

「そうね。じゃあ日向君も逃げる方ね」

「やっぱいいわ」

「…この裏切り者ーーー！！！」

「悪りぃな」

「制限時間は3時間よ。逃げれる範囲は……まあ常識の範囲内で。はい氷室君とっとと逃げる。5分後にスタートよ」

あーもう、手抜こう。

「ちなみに手を抜くような愚か者は後で地獄を見せるわよ」

う…。手を抜くわけにはいかないらしいな。

「それじゃあ…スタート！！！」

～ＮＯ　ｓｉｄｅ～

「行ったわね。あんたたち…負けたら１週間断食ね☆」

「「「「「「「「「「「「「う…」」」」」」」」」」」」」

こうして地獄の鬼ごっこが始まった。

～氷室ｓｉｄｅ～

あーもうゆりの野郎…あんな理不尽な鬼ごっこやってられるか！！
　と言いたいけど、地獄をみたく無いので、とりあえず頑張ってみるか。
ちなみにこれに参加してるのは、ゆり、日向、野田、高松、ＴＫ、松下五段、大山、藤巻、椎名、遊佐の１０人である。（俺除く）

「とりあえずテキトーに逃げるか」

俺はとりあえずグラウンドに逃げた。

俺は今グラウンドでぶらぶらしていた。
暇だなー。
すると…

「大山じゃん」

「あ…」

大山はポケットからトランシーバーを取り出した。

「氷室君発見。場所はグラウンド」

「やばっ。すまない大山」

「うわー！！」

俺は日本刀を抜き、大山を斬った。
すまない…。そうしている間に藤巻と高松が来た。

「おい、大山がやられたぞ！！」
「何ということですか」
「いやっ…悪りぃー」
「大山のかたきだ！！」
「ここで倒されてください」
藤巻は長ドスを、高松は銃を構えた。
「俺…負けんの好きじゃないから…本気だすわ」
「「！！」」
～ゆりｓｉｄｅ～
私は大山君から報告を受けて、グラウンドへ向かった。
向かうと、大山君はすでにやられていた。
高松君と藤巻君がそこにいた。
……私は見た。

目に見えない速さで彼ら2人を斬ったところを。
私は思わず目を疑った。

「嘘…？　彼こんなに強かったの？」

ある程度の戦闘力はあると思ってたけど、まさかここまでとは…
これはかなり期待できる。
とりあえず私はもう少し様子を見ることにした。

大山、藤巻、高松、脱落。

～氷室ｓｉｄｅ～

俺は今第二連絡橋の下でアップルジュースを飲みながら休んでいた。

「やっぱアップルジュースうまいわ」

その時、俺の飲んでいたアップルジュースが爆発した。多分、銃で

打たれたのだろう。

「そこまでだ！！」

「観念するんだな」

「ｆｉｎｉｓｈ！」

「野田、ＴＫ、松下五段…。よくも俺のアップルジュースを…」

「悔しかったら俺らを倒してみろ」

野田がハルバードで俺に斬りかかってきた。

「じゃあ…そうさせてもらうわ」

俺は野田の攻撃を避け、野田を日本刀で斬った。

「ぐはっ」

「まずは１人」

「ぐっ…。怯むなＴＫ」

「ＯＫ」

松下五段とＴＫが撃とうとしたが、そのまえに俺が銃を斬った。

「何だと…」

「ｗｏｗー」

そして俺は２人を斬った。

「あースッキリした。俺のアップルジュースをこんなんにしたからこうなるんだよ」

その時、俺の後ろからクナイがとんできた。
俺はなんとか避けた。

「こんなの投げる奴は…椎名しかいないか…」

「氷室…ここでやられてもらおう」

「……しゃーないなー」

けど女の子を斬るわけにはいかないな。
……そうだ。

「悪りぃ椎名」

「！！」

俺は椎名の背後にまわり、日本島の柄(つか)で頭を打って気絶させた。

「本当に悪りぃ」

俺はこの場を後にした。

野田、ＴＫ、松下五段、脱落。
椎名、気絶中。

俺は屋上に行こうとした。
俺は時間が過ぎるまで、ここで寝よう。
屋上に来てみると、

「あら、氷室さん来ましたね」

「お前は確か…遊佐か」

「はい。直接話すのは初めてだと思います」

「そうだな」

「じゃあ…ここでくたばってください」

「いやだ」

バンッ

遊佐が銃で撃ってきた。

「あぶねー」

俺は刀を抜き、柄で遊佐を気絶させた。

「また悪いことしたなー」

「そうだな」

突如日向が現れた。

「お前も俺を…」

「俺はお前のことを撃ちたくないが…。ちゃんとやらないと、ゆりっぺに怒られるからな～」

「俺は……お前のことを撃つけど…」

俺は銃を取り出し、日向のことを撃った。

「ぐはっ」

これで後は…ゆりだけじゃん。もう余裕だな。

「んじゃ、とっとと終わらせますか…ってなんでこんなとこにアップルジュースが」

屋上の出入口にアップルジュースが置いてあった。

「とりあえずいただきまーす」

アップルジュースを手にすると、突如アップルジュースが大爆発をおこした。

「ぐ……罠だったとは…　」

「ちょろいわね」

「やっぱりゆりか…」

「ええ」

ちくしょー。ここまできて負けたくない。
俺は立ち上がり、刀を抜いた。

「ゆり……。覚悟…」

「ちょっとまだやるの？」

俺はゆりを斬りかかろうとしたが、俺は気を失い、ゆりを押し倒してしまった。

「ちょっと／／／／　何してるのよ／／／／」

「……」

「氷室君ったら／／／／」

「……」

～ゆりｓｉｄｅ～

私は改めて氷室君の実力を知った。
彼はアホだけど強い奴だとわかった。
でもまさか最後にあんな単純な罠にひっかかるとは…。更に私のことを押し倒すとは…／／／／
緊張したー／／／／
復活した日向君に見られて、からかわれたので、蜂の巣にしといた。
けど…少し嬉しかった。
なんだろうこの気持ち…。

私以外のメンバーを1週間断食（水分含む）にしたのは、また別の話…。

Ｅｐｉｓｏｄｅ６　　鬼ごっこ（後書き）

作者「いやー、ゆりっぺさん。おあついですなー」

ゆり「ちょっと何作者までからかっているのよ。殺すわよ」

作「誰のおかげでこういうことができているのかなー？」

ゆ「……。次もよろしく頼むわ」

作「ラジャー。ってことで」

作・ゆ「「次回をお楽しみにー」」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5639y/

Angel Beats!＋オリ主 〜Another story〜

2011年11月21日19時32分発行